

# 降ひょうに対する農作物の技術対策について

令和 2 年 4 月 2 7 日  
農林水産部 担い手支援課

令和 2 年 4 月 2 4 日に千葉県では、降ひょうがありました。また、2 7 日は大気の状態が非常に不安定となっており、引き続き、落雷、突風や降ひょうに注意が必要です。については、次の事項を参考に、技術対策を実施してください。

## 1 ナシ

### <事後対策>

#### (1) 薬剤散布

##### ア 葉や幼果が損傷している場合

防除暦を参考に、記載されている農薬を被害後 2～3 日経過時点で散布する（雨が降る前に）。

##### イ 枝や幹に被害がある場合

直ちにトップジンMペースト原液を枝や幹の損傷部に塗布する。塗布が遅れると傷の回復が悪く、枯れ込みが多くなる。また、展葉も遅れる傾向があるので、塗布が遅れないようにする。被害面積が大きい場合は、被害程度の大きい園や「幸水」園を優先する（※折れた枝は切り返してから、塗布する）。

##### ウ 疫病対策

降ひょう、雨風によって疫病の感染が懸念されるので、被害後観察を丁寧に行い、発生が見られたら、直ちに罹病枝を切り取り園外に持ち出し、アリエッテイ水和剤 1,000 倍液を散布する。

#### (2) 被害樹の管理

##### ア 下記の被害程度に応じて摘果を実施する。

**激甚園**（残存している葉の損傷が 70%以上、または、落葉 30%以上）

⇒ 全幼果を摘み、樹勢回復に重点を置く。

**甚園**（残存している葉の損傷が 50～70%、または、落葉程度 30%未満）

⇒ 被害程度に応じた着果量調節

a 落葉程度 30%の場合……平年の 40～50%の着果量にする。

b    "    20%   "    ……    60～70%    "

c    "    10%   "    ……    70～80%    "

ただし、樹勢が低下している園では、被害程度に関わらず全幼果を摘む。

**中～軽程度の園**（葉の損傷はあるが、落葉はほとんど認められない）

⇒ 樹勢に応じて、着果量を加減する。

イ 芽かき、摘心は樹相を見ながら行う。中～軽程度の園は通常の管理とするが、被害の甚だしい園では当面、摘心等は行わず様子を見る。

## 2 野菜

### ○野菜共通

#### <事前対策>

圃場に窪地がある場合、ひょうの流れ込みとともに冷気がたまりやすいので、排水対策を行っておく。

#### <事後対策>

突風や降ひょうによって生じた傷口から病害感染のおそれがあるので薬剤を散布する。特に、今後の天候によって以下の病害の発生が懸念されるので注意する（カッコ内は病原菌の生育適温）。

炭疽病（22～28℃）、疫病（28～30℃）、べと病（20～25℃）、つる枯病（20～24℃）、褐色腐敗病（28～30℃）、菌核病（18～20℃）、軟腐病（30℃）

#### （1）すいか・メロン

果実や茎葉に損傷を受けた場合は、薬剤散布を行うとともに、薄めの液肥を葉面散布し、草勢の回復に努める。

#### （2）じゃがいも・食用とうもろこし

葉・茎の傷口等から疫病等の発生のおそれがあるので、薬剤の散布を行う。また、被害が軽度のものについては、葉面散布の実施や速効性の肥料を施用して生育の維持・再生を図る。

#### （3）ねぎ類・にら

葉の傷口から病害の侵入・発生のおそれがあるので、薬剤の散布を行う。株が倒伏した場合は、天候とほ場の状態の回復を待って、丁寧に起こす。また、株養成期の畑は、追肥等の管理を適期に行う。収穫期にあるにら畑では、葉の損傷がひどく、出荷が困難な場合は早めに損傷葉を刈取り処分し、新たに葉の伸長を促す。

#### （4）そらまめ・まめ類

葉が損傷した収穫間近の畑では、葉面散布や株元への速効性肥料の追肥を行い、倒伏株の立て直し等により、生育の回復に努める。さやに被害がある場合はすみやかに摘除し、埋却する。

#### （5）キャベツ

葉の傷口から病害の侵入・発生のおそれがあるので、薬剤の散布を行う。過剰な施肥は病害発生を助長するので、追肥は草勢の回復状況を見ながら行う。